

国 語 (二〇一四年度)

《注 意》

- 一 試験開始の合図があるまでは、問題用紙を開けてはいけません。
- 二 問題用紙は十二ページまであります。解答用紙は一枚です。
試験開始の合図があったら、まず、問題用紙、解答用紙がそろっている
かを確認、次に、解答用紙に「受験番号」「氏名」「整理番号(下じき
の下方の番号)」を記入しなさい。
- 三 試験中は、試験監督かんとくの指示に従いなさい。
- 四 試験中に、まわりを見るなどの行動をすると、不正行為こつぎとみなすことが
あります。疑われるような行動をとってはいけません。
- 五 試験終しゅうりょう了の合図があったら、ただちに鉛筆えんぴつを置きなさい。
- 六 解答用紙は、裏返して置きなさい。
- 七 試験終了後、書きこみを行うと不正行為とみなします。

次の文章を読み、設問に答えなさい。

高校に合格した笹本つよしは父親といっしょに自転車屋に行き、気に入った「クリステイ」という高価な自転車を入
学祝いに買ってもらいました。そのあと、つよしは父親と別れ、「クリステイ」に乗って、近所の商店街に向かいまし
た。

そこで自転車の「クリステイ」は自分のことを「おれ」と呼びながら、次のように語り始めます。

しばらくするとつよしは止まった。おれから降りると引きながら歩いた。つかれたのだろうか。妙な道に入った。それ
は商店街というもので、うわさには聞いていたけど、自転車や車は走ってはいけな場所らしい。何台かの自転車に会った
けど、みんな大きな荷物をのっけていたり、子どもをのっけていたりして、人が両手で引いている。

見たところ、△おれのようなかっこいい自転車はなくて、みな、ママチャリと呼ばれるくそまじめ系だ。おれは精一杯光
を放ちながら、商店街を引かれて行った。

しばらく行くと、つよしは藍色ののれんの前で立ち止まり、中をのぞいたりしてもじもじしていたが、やがておれを引き
ながらのれんをくぐった。買い物でもするのだろうか。

①店内は自転車屋よりずいぶんせまい。そこに清潔そうな男がすわっていた。

「いらつしやいませ」と男は言った。

つよしは立ったまま言った。「自転車あずかってもらえますか」

おどろいた！

おれはつよしとともにつよしの家に帰るのだと思っていた。だってそうだろう？ 自転車つてふつう、家に置いておくも
のじゃないか。家といつても中じゃないけど、庭とか、aソウコさ。家にびったりくっついた場所に置いておかないと不便
だろう？ 第一、あのとうさんはどう思う？ 会社から帰って自転車がなかったら「クリステイをどうした」つてあわてる
んじゃないのか？

それともなんだ、おれが世間知らずで、知らなかっただけで、自転車はこういうところにあずけるものなのか？ 常識か？

「初めてのご利用の時はお名前をうかがう決まりになっております」と店主は言った。つよしは曇を見ながら言った。

「笹本つよしです」

「笹本つよしさん、あずかり賃は一日百円です。何日おあずかりしますか」

つよしは少し考えて「三日」と言った。それから顔を上げ、「ここ、朝は何時からやってますか」とたずねた。

「七時から開店しています」

「三日後、朝の七時半に取りにきます」

「わかりました。もし三日を過ぎても取りにいらつしやらない場合は、うちのものになります」

「ぼく、絶対来ます」そう言つて、つよしは三百円を置いて出て行った。

それからおれは二日間、奥でただっ立っていた。自転車屋でぶらさがっているより、見えるものは少ないが、聞こえる
音で、この店のことがだいぶわかった。
ここはあずかりやという商売をしており、人はいろんなものをここに持ちこむ。店主はそれを金をとってあずかる。

三日目の朝七時半ぴつたりに、つよしはやってきた。

おどろいたことに、つよしはぎいぎい音をさせてやってきた。手にはさびた自転車を引いている。センスのないあずき色
で、古い型の自転車だ。

「夕方まであずかってください」と言つてつよしは百円を置き、あずき色の自転車を店主にあずけると、かわりにぴかぴか
のおれを引いて店を出た。

②なにがなんだかわからないまま、おれは商店街を引かれて行った。
つよしは三日前とちがう制服を着ていた。少しサイズが大きいみたいだ。商店街をぬけると、つよしはおれにまたがり、
大通りを走った。おれは走った。つよしと走った。

三十分ほど走ると、つよしと同じ制服を着た若者がうようよいる場所に着いた。これがうわさの高校つてやつだな。
みんなかしこそうな顔でぴかぴかの自転車に乗っている。しかしおれほどの自転車はほかにない。だつて自転車たちはみ
なおれとすれちがうと「ミスター・クリステイじゃないか！」と感嘆のためいきをもらした。自転車界でおれはスターだか
らな。

③おれは精一杯光りがやき、すばらしさを見せつけた。どうだ！ つて感じさ。
つよしはおれを自転車ばかり並んでいる場所に置き、かぎをかけた。七番という場所で、となりの六番には最悪な自転車

があった。くたびれたママチャリだ。子どもっぽいピンク色だし、おどろくべきことに、ちいさい子どもをのつけるシートがトップに付いている。ママチャリ中のママチャリではないか。なんで高校にママチャリがあるんだ？

おれは駐輪場でつよしがもどるのを待った。ほかの自転車から「きみはなんてかつこいいんだ」とか「大切にされてるんだろな」と話しかけられ、そりやあもう、ちやほやされっぱなしだったけど、あずかりやにいたとも言えないから、自宅の駐輪場の豪華さを語ってやった。

④六番のママチャリはひとことも口をきかない。高校の駐輪場にふさわしくない自分をはじているのだろうか。おれはあずかりやのあずき色の自転車を思い出した。あれはひどい。おばさんが使うようなタイプで、ゆがんだカゴが前に付いていた。おばさんというよりばあさんに似合いそう。

あれにくらべると、六番のママチャリはそこそこの手入れがされているし、なんとなくだけど、持ち主に愛されている感じがした。

ふと思った。おれの持ち主はだれかと。それはきつとつよしにちがいない。つよしはおれを愛しているだろうか。やがてつよしはやってきた。友人に「笹本、すげえかつこいい自転車だな」なんて声をかけられ、うれしそうに「入学祝いなんだ」と答えていた。

そして再びおれは走った。つよしと走った。風を感じた。走っている間は不安なんてちらつともうかばない。だってさ、すげえ楽しいんだもの。運転手は若くて体が軽いし、運転はたしかだし、若いからスピードも出してくれる。

おれにぴったりの持ち主だ。つよし、最高！
しかし今日も商店街に入った。つよしがおれから降りて手で引き始めると、もくもくといやな気持ちがおれの心を支配した。つよしはまだおれをあずけるのか。そしてあずき色の自転車といつしよに家に帰るのか。

予想は当たった。藍色ののれんをくぐると、つよしはおれを店内に入れ、店主に「またこれをお願いします」と言った。こんどは「明日の朝まで」と言う。

店主はわかりましたと言って、百円を受け取ると、奥からあずき色の自転車を引いてきた。
つよしは去った。おれは店主の誠実な手により奥にしまわれた。

その後、つよしは月曜から金曜日、朝、おれを取りに来て高校へ行き、学校が終わると帰りにあずかりやにあずけた。必

ずあずき色を引いてきて、あずき色を持ち帰った。

土曜と日曜は別モノだ。つよしはどちらかの昼間に手ぶらでやってきて、いつもとちがう道を走った。

木が多い公園に行ったときは、葉っぱのにおいを知った。つよしはおれに世の中を見せてくれる。おれは自転車屋の天井にぶら下がっていたところより、いろんなものを見、知ることができたが、一番見たいものは見せてもらえなかった。それはつよしの家だ。

ある日曜の夕方のこと。つよしはその日おれと山に登り、そうとうくたびれていたようで、あずかりやに入ると、店主にこう言った。「いちいちお金をやりとりするのはめんどろなので、一カ月分はらっておいてもいいですか」

「もちろんかまいませんが」と店主は言い、そのあと遠慮がちにこう言った。

「駅前の駐輪場でトウロク手続きをすれば、一カ月四百円でスミますよ」

つよしはしばらくだまっていたが、「自転車をここにあずけては迷惑ですか」とたずねた。

店主は笑顔で言った。「こちらのかまいません。ただ、笹本さんは学生さんなので、このまま一日百円をいただき続けるのもどうかと思ひまして」

つよしは「駅前だとかおかあさんが気付くので」と言った。

店主は座布団を差し出し、「もしよかったですら相談にのりますよ」と言った。

「お話を聞いてもけしてコウガイしません。話すだけ話してみるのはどうですか」

そう言われて、つよしはしばらくもじもじしていたが、やがてくつをぬいで上がった。

「おこづかいが足らなくなってきたから、もうそろそろおしまいにしないといけないって思うんです」

店主はうなずいた。

85 「高校に通うのに自転車が必要なんです。おかあさんは、一生けんめい自転車を探してくれて、あのあずき色の」と言いかけて、つよしははっとして、言葉を選び、言い直した。

「古い自転車をアパートのおとなりの遠藤さんからゆずってもらったんです。遠藤さんはもう歳で自転車に乗れないから、捨てようと思ってた、って言ってました」

「遠藤さんからゆずっていた自給車なんです」

90 「はい。ぼくのおかあさんはやさしい人です。お金があれば買ってくれるんですけど、朝早くからスーパーで働いて、夜は

弁当屋で働いて、でも自転車は買えないんです。ぼくの学費をためているんです。大学へ行かせるんだってはりきっています」

「自転車は高いですからね」

95 「それで、遠藤さんからゆずってもらった自転車をぼくにくれたんですけど」 つよしはそこでだまった。すると店主が言った。「遠藤さんの自転車はしつかりした作りですが、若い人が乗る自転車とちがいますから、通学に利用するのは少しはかしいですよ」

つよしははっとした。おれもはっとした。店主は誠実だが、頭がやわらかく、この手の話も通じるのだと思い、おれはなんだかほっとしたし、つよしもほっとしたようだ。

100 つよしの口は油をさしたように、がぜんすべらかになった。「おとうさんに入学祝いに何がほしいって聞かれたとき、ぼく、自転車って言っちゃったんです。せつかくおかあさんが用意してくれたのに」

つよしは正座した太ももの上にげんこつをにぎっていたんだけど、それをことさらに強くにぎり、「⑤朝、おかあさんがくれた自転車で家からここまで来て、ここでおとうさんが買ってくれた自転車に乗りかえて、学校へ行ってるんです」と言い、はき捨てるようにこう付け加えた。「ぼく、おかあさんをだましてる」

105 「だますだなんて、おかあさんを思つてのことでしょう？ それにかっこいい自転車に乗りたいのは、あなたくらいの年齢では当然でしょう」

つよしは「ふつうの家族だったらそうかもしれません」と言った。

「おとうさんとおかあさんはぼくが幼稚園に通っているころに別れて、ぼくはそれからずっとおかあさんと暮らしています。おとうさんは今別のひとと暮らしています」

「そうなんですか」

110 「おとうさんはときたまぼくに会って、ものを買ってくれようとするんだけど、ぼくは今まで断っていました」

「なぜですか」

「おかあさんがぼくを一生けんめい育てているからです」

「それだとしておとうさんからものをもらってはいけないんですか」

「おかあさんがぼくに一生けんめいで、おとうさんはぼくに一生けんめいじゃない。なにお金を持っているから、ぼくを

115 簡単に幸せにできるんです」

そのときのれんがゆれた。つよしをはげますように、いい風が入ってきたのだけど、つよしの表情はかたいまんまだ。

「おかあさんは頭をいっぱい下げて、何日もかけて古い自転車を手に入れました。おとうさんはカードを出すだけで、クリステイを手に入れました。かかった時間はほんの数分でした。なのにぼくはクリステイが好きなんです」

すると店主は言った。「お金を手に入れるのも簡単なことではないですよ。おとうさんもあなたに一生けんめいなんだと思いますよ」

120 つよしの頬はかあつと赤くなった。そういうふうに考えたことがなかったようだ。

店主はやさしくこう言った。「おかあさんに本当のことを話せば、喜んでくれると思いますよ。だいじな息子がかっこいい自転車に乗っている。それを喜ばない母親はいないと思います」

するとつよしは大きな声を出した。「もちろんそうです！ きつとおかあさんはクリステイを喜んでくれる」

それから小さな声で言った。「でもぼくは」

125 しずかな時間が流れた。つよしは自分の気持ちを探しているようだった。やがてつよしはそれを見つけた。「ぼくがいやなんです」

つよしは立ち上がり、「明日また来ます」と言って、あずき色の自転車を引いて出て行った。

130 店主は口答えをされたのに、さわやかな笑顔をうかべていて、つよしの発言に満足しているようだ。

おれ？ おれはなにがなんだかようわからん。世の中は複雑すぎる。

ただ、これは想像なんだけど、つよしはあずき色の自転車を愛したがっているんじゃないかな。けれどもうまく愛せないから、いらついている。そういうことなんじゃないか。たぶん、そう。

そこまで想像すると、おれの心はしーんとした。

135 だってこれって、つよしとあずき色の問題であって、おれってあんまし関係ないんじゃないかと思えて来たんだ。ふーっとさびしい気持ちになった。

それから一週間後、いつものように高校の駐輪場でつよしを待っていた。五月の陽気にうとうとしていると、騒音に目が覚めた。

140 となりの六番のピンク色のママチャリをガタガタやっている女子高生がいて、そいつがひじでうっかりおれをたおし、あれよあれよという間に、おれから右にある自転車は全部たおれちゃった。

自転車たちの悲鳴が聞こえる。あーあ。女子高生ってやつは！

しかし自転車たちはそのあとみな文句を言わなかった。だってその女子高生はまじめな顔で一台一台、きちんと起こしてゆくし、なにしろその女子高生がやたらと美しかったからだ。

145 髪はストレートのロングで、肌は白く、目は黒目がちで、鼻もすつきり、くちびるはうるうるとしている。そのくちびるをかみしめて一台一台きっちり起こす。自転車全員が息をのみ、彼女に起こしてもらうのを待った。真っ先に起こしてもらったのはおれだけ、彼女はいいにおいがした。なんだろう、このにおい。立派な人間のおいにちがいない。

彼女がほかの自転車を起こしているとき、ピンク色のママチャリが初めておれに話しかけた。

「ごめんなさいね」

おれはあわてた。とっさに返事ができない。

150 「あなたのサドルの支柱にキズがついてしまったわ」

「そうか？」

ほんの少しだけど、あなた、キズついてしまったわ」

おれはピンク色のママチャリをじっと見た。彼女はそもそもキズだらけだ。おれのキズを気にしてる場合じゃないだろう。

その思いが伝わったようで、ママチャリは言った。

155 「わたしはいいの。とても古いし、いつ捨てられてもおかしくないくらい、使ってもらってるから。でもあなたにキズは似合わない」

「気にしないでいいよ」

「わたしあなたを知ってるの。自転車屋の天井からぶら下がっていたでしょう？」

「おれを見たのか？」

160 ママチャリは、はにかんだように話す。「わたしあそこ、何度か修理してもらってるの。天井のあなたがいつもぴかぴか光ってて、月みたいにまぶしかった。あんなところから世界を見下ろせるなんてすごいことだと思ったわ」
そうか。そんなふうに見えていたんだ。

165 「あなたとこんなところで肩を並べる日がくるなんて、すごく意外だったわ」

「どうしてもっと早く言ってくれなかったんだ。おれを知ってるって」

「だってあなた、お店にいたところ、外ばかりながめていたじゃない。修理されてる自転車なんか、目に入らなかったでしょう？ わたしはあなたを知ってるけど、あなたはわたしを知らないから、ここでいきなり声をかけるなんて、なんだかはずかしくて」

そのあとママチャリは口ごもった。

おれは胸がきゅんとした。恋かもしれない。

170 「おれととなりで、あの、あのさ」

「なあに？」

「うれしい？」と聞いてみた。

175 すると意外なことに、ピンク色のママチャリはためいきをついた。「どうかしら。このあいだ自転車屋でパンクを直してもらったとき、天井にあなたがいないくて、あそこの空間が妙にさっぱりしちゃってて、退屈な場所になってしまったわ」
そんな会話をしている最中にも、女子高生は確実に自転車を起こしていき、あと一台で終了というところで、すつと別の手がのびた。

つよしは何も言わずに最後の一台を起こした。

彼女はにっこり笑ってつよしに「ありがとう」と言った。

つよしは頬を赤くして「B組の荒井さんだね」と言った。

180 「ええ、なんで知ってるの」

つよしはだまった。

作業を終えた荒井さんはピンクのママチャリを引いて歩いた。つよしはおれを引きながら、彼女の少し後ろを歩いている。荒井さんはふり返ってつよしに言った。「となりの自転車、かっこいいなあって前から思ってたんだけど、あなたが持ち主なのね」

185 「A組の笹本」つよしはぼそつと自己紹介した。

荒井さんは言った。「わたしのこの自転車、おかあさんのお下がりのの。ねえ見て。信じられる？ わたしもここに乗っ

でたんだから」

荒井さんはチャイルドシートを手でぼんぼんとたたいた。

190 「はすさないの？」とつよしが聞くと、「だってこれから保育園に妹をむかえに行くのよ」と荒井さんは言った。⑥「妹のおむかえはわたしの任務なの」荒井さんは「任務」に力をこめて言い、胸をはった。

おれはどきっとした。荒井さんがきらきらとかがやいて見えたからだ。その横で⑦ピンク色のママチャリもびかびかと得意げに光っている。

195 自転車屋にぶらさがってた時、外を走る自転車はみな光って見えた。あの光り方と同じだ。まぶしい。荒井さんとママチャリ、最高のコンビだ。

つよしと言ったらもう、あほうのように口を開けてつつ立っている。なにか言え、ばかやろう。話をつなげるんだよ！

おれだってあほうだ。ピンクのママチャリに「Bきみってかっこいいな」って言いたいのになんか言えない。

荒井さんは白馬にまたがるように、ママチャリにまたがった。

「じゃあね」と言っただけで荒井さんは黒髪をなびかせて行ってしまった。

200

その帰り、つよしはおれと走った。

妙なんだ。つよしは真剣な顔をして、いつもとちがう道を走った。どんどんどんどん走って走って、走りまくった。地球を一周まわっちゃうくらいいいきおいだ。つよしの足の速さにおれは必死についていく。

回れ！ 回れ！

前にあるものすべては後ろに消え、ぜんぶぜんぶ過去になり、おれたちは未来を目指す。

205

まだ行ける！どこまでも行ける！

やがてつよしの息があらくなり、足が止まった。そこに、見たこともない風景が待っていた。でっかい水たまりだ。つよしは言った。「海だよ」

ひとりごとじゃない。これ、絶対絶対、おれに言った。おれを仲間と認めて、おれに話しかけてきたんだ。おれはできる限りの努力でもって「そうか、海か」と返事をした。しゃべれないけど、ハンドルを通じて気持ち伝えたと思う。

210

おれとつよしは海にしずむ真つ赤な太陽を見た。時間をかけて、しっかりと見た。太陽はすっかりしずんでも、まだあた

りは明るくて、明るさが残っているうちに、おれとつよしはあずかりやへもどった。

215 それがつよしと走った最後になった。⑧以来、つよしはあずかりやにおれをむかえにこない。つまり、おれは、捨てられた。

がっかりしたかと言え、まあ、した。しかし最悪な気分とはちがう。つよしはあずき色の自転車を好きになれたのだから。おれをきらいになったとか、あきたとか、そういうことではないのだから。もともとおれはつよしの心になかったのだから。

だけど一回は会話をした。夕陽と海が見える場所で。

それを思い出して今後を過ごそう。

「大山淳子『ミスター・クリスティ』（『あずかりやさん』（ポプラ社）所収）より」

（語注）※① 感嘆：感心してほめたたえること

※② がぜんすべらかに：急になめらかに

〔設問〕 解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一 線 a 「ソウコ」(13行目)、b 「トウロク」(75行目)、c 「ス」(75行目)、d 「コウガイ」(81行目) のカタカナを、漢字で書きなさい。

二 線 ① 「店内は自転車屋よりずいぶんせまい」(8行目)とありますが、この店はどのような商売をしていますか。それがわかるひとつづきの二文をぬき出し、最初の五字で答えなさい。

三 線 ② 「なにがなんだかわからない」(34行目)とありますが、「おれ」がこのように思うのはなぜですか。1行目から33行目までを読んで答えなさい。

四 線 ③ 「おれは精一杯光りかがやき、すばらしさを見せつけた。どうだ！ って感じさ」(41行目)とありますが、このときの「おれ」の気持ちを説明しなさい。

五 線 ④ 「六番のママチャリ」(48行目)について、「おれ」はどのように思っていますか。42行目から55行目までを読んで説明しなさい。

六 線 ⑤ 「朝、おかあさんがくれた自転車で家からここまで来て、ここでおとうさんが買ってくれた自転車に乗りかえて、学校へ行ってるんです」(101～102行目)について、以下の問いに答えなさい。

(1) 「おかあさん」は、つよしが学校に通うために必要な「自転車」をどのようにして手に入れましたか。その理由もふくめて説明しなさい。

(2) つよし「おかあさんがくれた自転車」で学校に行かないのはなぜですか。説明しなさい。

(3) つよし「おとうさんが買ってくれた自転車に乗りかえて、学校へ行ってる」ことについて、どのように思っていますか。説明しなさい。

七 158行目から174行目までの部分から、「ママチャリ」が「おれ」をどのように思っていたことがわかりますか。次の中からふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 自転車屋の高いところに展示されて光りかがやいていた「おれ」を、自分とはまったく別の世界にいるものとしてあがれていた。

イ 自転車屋の高いところから世界を見下ろしている「おれ」をすばらしい自転車だと思い、自分のそばに来てほしいと思っていた。

ウ 自転車屋の高いところで光りかがやく「おれ」をととても美しいと思い、自分のようにキズだらけでなくてうらやまし

エ 自転車屋の高いところから「おれ」がいつも外ばかりながめているのを見て、自分のことを気にかけてくれないことを悲しく思っていた。

八 線 ⑥ 「『妹のおむかえはわたしの任務なの』荒井さんは『任務』に力をこめて言い、胸をはった」(189～190行目)とありますが、ここには「荒井さん」のどのようなすがたがあらわれていますか。次の中からふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 自分が幼いころから「おかあさん」が使っていた自転車を何度も修理しながら大切に使い続け、今は自分がそれに乗っていることをほこりに思い、ものを大切にすることがあらわれている。

イ 昔「おかあさん」が自分を自転車に乗せたように、今は自分が妹のおむかえをすることを、家族のために役立っているところほこりに思い、家族のつながりを大切にすることがあらわれている。

ウ 高校生なのに、「おかあさん」とおなじように立派に働いて、家計を助けているということをほこりに思い、あたえられた仕事をかんべきにこなすことを大切にすることがあらわれている。

エ 「おかあさん」のお下がりに乗っていて、妹のおむかえをしなければならぬことが本当ははずかしいのだが、気にしてないようにみせられる強い自分を大切にすることがあらわれている。

九 線 ⑦ 「ピンク色のママチャリもびかびかと得意げに光っている」(191～192行目)とありますが、四つの…線(155行目、160行目、186～187行目、189行目)に注目して、このときの「ママチャリ」の気持ちを説明しなさい。

十 線 A 「おれのようなかっこいい自転車」(4行目)、線 B 「きみてかっこいいな」(196行目)には、どちらも「かっこいい」が使われていますが、AとBでは言葉の内容が変化しています。それぞれの内容を説明しなさい。

十一 線 ⑧ 「以来、つよしはあずかりやにおれをむかえにこない」(213行目)とありますが、つよし「おれ」に乗って学校に行くことをやめたのはなぜだと考えられますか。200行目から211行目までの場面でのつよしの「おれ」に対する

思いをふまえて、ていねいに説明しなさい。

〈問題はここで終わりです〉

受験番号	
氏名	

(2 0 1 4 年 度)

国語解答用紙

a									
b									
c									
d									

一									
二									
三									
四									
五									
六									
七									

八									
九									
+									
A									
+									
B									

(合 計)	
---------	--

--

(整理番号)